

令和 元年 6 月 6 日現在

機関番号：37503

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2018

課題番号：15KK0066

研究課題名（和文）朝鮮における古代道路の歴史地理学的復原に関する基礎的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Basic research on historical geographical restoration of ancient roads in Korea
(Fostering Joint International Research)

研究代表者

轟 博志 (Todoroki, Hiroshi)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：80435172

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,000,000円

渡航期間： 12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究においては、新羅の駅路復原と、関連する都市の景観復原を軸に据えた。

新羅の五通について、三国統一前と後において、大道路体系の態様と原理が大きく異なっていることがわかった。統一前では、領土拡張のための軍事目的が優勢であり、防衛に有利な要害を経由するルートがとられた。一方統一後は、領内の統治と交易、外交に目的の重点が移動し、平地を中心に直線で移動する、典型的な古代帝国の道路の形態となった。

古代都市に関しては、州治の立地に合わせて五通の経路が確定したと考えられ、また五通に合わせて五小京が立地した。どちらも幹線道路を軸とした碁盤目状の街路計画が施行され、その痕跡は今でも残っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日韓を始めとした東アジア各国の古道研究は、専攻分野別・対象国家別・また研究者の所属国別に、ほとんど交流をもたずに進んできた。これは研究者がほぼ重なる古代以外の時代の交通史研究においても同様である。

本研究は彼らが専攻や国家の枠を超えて連携し、共同で研究し、発表し、討論し、巡検し、執筆する機会を提供するので、学際的・国際的研究交流が活性化・恒常化する始発点になると考える。知見の共有や比較研究が活性化することにより、研究の飛躍的な前進も期待できる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we focused on (1) Silla station road restoration and (2) landscape restoration of related cities.

1) It was found that the aspect and principle of 5 trunk road system are greatly different before and after the three countries unification. Prior to reunification, military objectives for territorial expansion were predominant, and routes were taken via defense-friendly necessities. On the other hand, after the reunification, the emphasis was placed on the rule, trade, and diplomacy in the territory, and it became a form of a typical ancient empire road that moves in a straight line centered on the plains.

2) For the ancient city, it is thought that five routes were decided according to the location of the state administration, and five sub-capitals were located according to five routes. In both cases, a grid-like street plan centered on a main road has been implemented, and its trace still remains.

研究分野：歴史地理学

キーワード：歴史地理学 古代道路 新羅 三国時代 駅路 九州五小京 五通

1. 研究開始当初の背景

朝鮮半島における古代道路の経路復原研究は日本統治期に源流を発し、文献史学及び考古学の分野で、日韓の研究者によって比較的活発に行われてきた。しかし、それぞれが別途に研究を進め、また日本や中国と異なり文献史料や考古資料が限られているため、路線網に関して諸説がいまだに錯綜している状態である。本来その隙間を埋め、史資料の限界を歴史景観論による推論で埋める役割を果たすのが歴史地理学であるが、地理学者の関与は申請者等ごく一部に限られており、やはり他分野との研究交流が行われていない現状である。

2. 研究の目的

申請者は歴史地理学の立場から、本研究の基課題である「朝鮮における古代道路の歴史地理学的復原に関する基礎的研究(基盤C:25370930)」を、今年度を最終年度として行っている。しかし歴史地理学者が単独で行う研究であり、文献史学や考古学との十分な連携を欠く課題であったために、地理学の立場からの復原方法論の提示と、部分的な事例研究に留まってしまった。また予算に比して、当初の想定以上に古代道路の延長が長かったことにより、古代道路全体に対する悉皆調査を行う余裕がなかったことが惜しまれる。さらに基課題の遂行を通じて、類似した駅制を持つ中国(唐)や日本(律令下の駅路・伝路)の古代道路との比較研究が先行せねばならないことがわかった。同様に朝鮮内においても、事例とした新羅の五通のみならず、渤海五道や百済・高句麗の駅路との総合的な分析の必要性も確認された。

3. 研究の方法

以上のような基課題における結果と反省から、基課題の完成と発展のためには、文献史学 歴史地理学 考古学を軸とした学際的連携(タテの連携)と、日本 韓国 中国を軸とした国際的連携(ヨコの連携)の必要性が認識された。そのためには国際的な研究連携が不可欠と考え、折よく公示のあった本プログラムに応募することとした次第である。従って本研究の主目的は、朝鮮半島における古代道路経路の歴史地理学的復原を、当時の国際文化圏の位置づけの中で、国際的・学際的な連携のもとに、網羅的に行うこととなる。

上記のような基課題の経緯を踏まえ、大きく分けて以下の3点の補強点及び発展方向が導き出された。これらの三点を研究期間内に相互連携しつつ推進することで、本課題では朝鮮半島における古代道路経路の歴史地理学的復原を、新羅の「五通」を主事例として、当時の国際文化圏の位置づけの中で、国際的・学際的な研究連携のもとに、網羅的に行うことを、主目的とする。またその結果得られた朝鮮古代道路の特性を、学際・国際的な共同研究を通じて明らかにする。

1) 全数調査

基課題において、一部路線(北海通)や地点のサンプリングをした形での、古代道路復原が行われたが、それを朝鮮半島の「五通」全路線に拡大し、新羅の幹線交通路の全貌を明らかにする。さらにそれを通じて蓄積された地理データにより、基課題の

理論的成果を精緻化するなど、基課題と本課題の間に相互作用が生じる形とする。

具体的には、筆者が中原京付近と溟州付近で試みた道路や古代都市の復原手法を、五通全体および九州五小京（地方都市）全体に広げた調査を行う。そのために該当区間及び都市の近代及び現代の地籍データを取得・分析し、全区間にわたるミクロスケール（地籍図レベル）の詳細な復原図を作成する。さらにはこれらの成果を踏まえ、基課題で既に作成したマクロスケール（全国）・メソスケール（地形図レベル）の復原図も細部にわたって再検討と修正を行う。結果として、本研究の成果として3つのスケールによる複合的な復原図を完成させることを目標とする。道路や都市の他にも、駅・院・山城などの記録に残る交通路関連施設等の立地・分布比定を行い、また小字単位での地名の収集も悉皆的に行い、復原図の精緻化を図る。同じ目的で、仮復元された経路に関して、徒歩と車両を併用しての現地景観調査を行う（現北朝鮮管内は除く）。資料収集や分析、現地調査に多大な費用と人的資源が必要になることから、通常の科研費では不可能に近いと思われ、本基金によって始めて可能となる。

2) 学問分野間の連携

歴史景観の復原や場所の比定は、文献史学（上流） 歴史地理学（中流） 考古学（下流）の流れが連携して初めて可能となる。朝鮮の古道研究は時代を問わず、文献史学と考古学の分野が別々に進行し、多くない史料や発掘事例数が限界となって、なかなか進展が見られないという構造的な問題を抱えていた。この状況を打破するためには歴史地理学が間に入り、上記三分野の有機的な連携を誘導・実践することが、現時点で重要であると考え、申請者が過去17年間に培った韓国内の学際的研究者人脈を通じて、本課題の「インフラ」として学際共同研究体制を構築する。これを仮に「タテの連携」と呼ぶ。

3) 地域間の連携等

新羅の道路制度や規格は、先行研究やこれまでの筆者の研究から、同じ文化圏・時代に属する中国（唐）や日本（律令時代）との類似性が指摘され、より正確な復原のためには、日本 韓国 中国を拠点とする研究者、またそれらの国を研究対象とする研究者との連携が不可欠である。折しも三国の交通史学会で連携の動きが出ており、申請者も部分的にそれに携わってきたので、そのネットワークを利用して、比較研究のための東アジアにおける地域間連携体制を構築する。これを仮に「ヨコの連携」と呼ぶ。

4. 研究成果

本研究においては、新羅時代の駅路復原と、関連する都市の景観復原を軸に据えた。新羅の五通については、基盤Cの時代に既に行っていた北海通以外の四本の道路について、レンタカーによる現地調査を交えて復原を行った。その結果、新羅の三国統一前と後において、大道路体系の態様と原理が大きく異なっていることがわかった。統一前では、領土拡張のための軍事目的が優勢であり、防衛に有利な要害を経由するルートがとられた。一方統一後は、領内の統治と交易、外交に目的の重点が移動し、平地を中心に直線で移動する、典型的な古代帝国の道路の形態となった。

統一前には方面別の陸軍司令官である「四方軍主」の駐屯地へ向けた四つの幹線が存在したとみられ、それが統一後に五通に拡大した。副都である五小京は、五通の延長線上に造成されたと考えられ、そのため小京の数も五に合せてある。小京は日本の太宰府のような外交的機能があったと考えられ、統一後に付加された経路である東海通は、金海京を経由して日本へ向かう道であったと考えられる。

本研究ではまた、道路上の重要な都市である小京と州治の立地と構造についても探求した。州治の立地に合わせて五通の経路が確定したと考えられ、また先述のように五通に合わせて五小京が立地した。どちらも幹線道路を軸とした碁盤目状の街路計画が施行され、その痕跡は今でも道路、水路、地籍、行政区画などに残っている。以上のような成果を、最終年度には2本の論文と7本の学会発表にて発表を行った。引き続き、書籍化に向けて、総論部分の完成を目指してゆく。



図：新羅五通の復元図

5. 主な発表論文等
(研究代表者は下線)

[雑誌論文](計3件)

轟博志、新羅北徭通復原序説(韓国語)、Asia Review 8号、査読あり、2019、139-161.

轟博志、朝鮮時代古地図に現れた古代都市の痕跡に関して(韓国語)、Journal of the Korean Research Association of Old Maps 10号、査読あり、2019、59-77.

轟博志、新羅の幹線駅路とその変化、海路 13号、2017、15-30.

[学会発表](計 件)

轟博志、新羅駅路の歴史地理学的線形推定、Exploring Channels of Civilization Exchange in East Asia-Studies on Ancient Routes and Roads, Seoul National University Asia Center, Ritsumeikan Center for Asia Pacific Studies、2019

轟博志、統一新羅時代における海南通の経路について、韓国文化歴史地理学会、2018

轟博志、Sea road or land road? Silk Road in Korea、16th ASIA PACIFIC CONFERENCE、2018

轟博志、鶴峯使行路の歴史地理学的検討、鶴峯『海槎録』再照明学会議、2018

轟博志、韓国古代都市における景観の継承 南原京の事例、人文地理学会大会、2018

轟博志、Characteristics and continuity of road traffic in Silla、T2M Annual Conference2018 in Montreal、2018

轟博志、古代由来都市立地の連続性、大韓地理学会大会、2018

轟博志、朝鮮の峠 国土の人文と自然が疎通する窓口、「峠の生態と文化」(ソウル大学アジア研究所、韓国山林科学院)、2018

轟博志、新羅溟州治の立地変動、14th AP Conference、2016

轟博志、地籍原図を活用した新羅中原京の景観復原、2016 地理学大会、2016

轟博志、統一新羅時代「五通」の歴史地理学的再考、歴史地理学会、2016

[図書](計1件)

轟博志、国学資料院、地籍図で探す閩慶の古道、2017、152

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

研究協力者氏名：丁致栄

ローマ字氏名：Jung Chiyoung

所属研究機関名：韓国学中央研究院

部局名：韓国学大学院

職名：教授

〔その他の研究協力者〕

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。